
任務と日々

今日暇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

任務と日々

【Z-コード】

N6331M

【作者名】

今日暇

【あらすじ】

私立高校に通う高校二年生でありながら、ある軍隊の特務部隊に所属する出雲雨入。

これは、そんな彼の任務と日々を綴った物語。

序章（漫畫版）

誤字等の//スガノヤニコモツタノリ報道宣しべお願いしめや。

出雲雨入はある私立高校に通う高校一年生にして、ある軍隊の特務部隊に所属している。

特務、と言つてもその種類は様々だ。要人の護衛から落とし物の搜索まで本当に様々である。特務部隊とは、そのような特殊な任務を果たすべく集められたエリート部隊である。

そんなエリートの一人である出雲は、高校中につかつてきた上司からの電話に対応している。

「……と言つ事があつてねー？私達の出番らしいよ？」

相変わらず甘つたるい声だ、と出雲は心の中で毒づく。自分より十
くらい歳が離れていた筈だ。

「つまり何ですか？今度この辺りでコンサートを行つ歌手の護衛を
しろと？」

うむ、とこゝへ如何にも威厳あるよつと言つた感じの返事が返つてくる。威厳などかけらもないので。

「何で歌手の護衛なんかするんで？」

「なんでもねー？その歌手の親類がうちの上層部らしくてね？敵対組織が人質に取ろうとしてるらしいのね？」

お偉いさんの親類かよー、と出雲が愚痴を漏らす。傷でもつけたら懲罰もんだな、とげんなりしていると、上司が甘つたるい声でこう付け加える。

「そう言えば万が一の為にそちらに増援が向かつた筈だよー？その辺りにいない？」

増援？と出雲が首を傾げながら周囲を見回す。

すると、ダンボールに入っている少女を見つけた。

「……えーと……あれ？」

「あれ？と言われても私には見えないんだけどね？」

思考が硬直した出雲の問いに、冷静にツツコむ甘つたるい声。

「多分、部隊章を着けている筈だけどね？見えないかな？」

そう言われて良く見てみると、少女の胸の辺りに見慣れた部隊章の
ようなものが。

「任務の詳細は、その子から聞いてねー？」

じゃねー、と一方的に通話を切られてうなだれている出雲を見て、
例の少女が近づいてくる。

出雲が顔を上げると、少女は開口一番いひつ言つた。

「アンタが私のパートナー？随分と冴えない顔をしてるわね、まあ
私の奴隸にならピッタリね！」

そつ言いながら見せる少女の満面の笑みを見て、出雲は心中で溜
息をつく。

また厄介な事になりそうだ……

序章（後書き）

感想や批評等、お願ひします

第一章（前書き）

誤字などは//スガジョモしたらJR報知をお願いします

第一章

「さて、まずは自己紹介からかしら」
その声を聞いて、出雲は改めて顔を上げて少女の姿を見る。
年は同じくらいであろうか。動きやすい様に短く切られた艶やかな
栗色の髪、端正に整った顔立ち、そこそこ女性らしい体は、特務部
隊の制服で隠されている。

「特務少尉の岩代湊よ、
ミナ様とも呼びなさい」

岩代と名乗る少女は、さう言って威圧的な態度で出雲に手を差し延
べる。

「はは……、俺は特務大尉の出雲雨入だ。宜しく、ミナ」
苦笑しながら挨拶をする出雲を見て、ミナがムッとする。

「気に入らないわね……、私より偉いだなんて！」

ドン！とミナが近くの壁を叩く。

「しかも初対面で呼び捨て！？なり、」口を叩いて呼び捨てでタメ

口でやらせて貰うわよ、アマイ！」

「分かった……。

ところで今回の任務の詳細を聞いてないんだが、……」

出雲が適当に頷きながら聞いてみると、ミナはビックリでもした氣に言
う。

「それは後で説明するわ。それよりさ、時間、大丈夫？」
言われて、恐る恐る腕時計を確かめる。

8時40分 ホームルームの開始時間8時45分

出雲の全身から冷や汗が出てくる。

「ヤバい遅刻だ！？」

出雲は慌てて鞄を持って学校へ向かう。

だつせー、といつミナの言葉を聞いている暇も無く、出雲は一心不乱に走りつけた。

私立聖楓学園。出雲が通う中高一貫の学校で、出雲はその高等部の生徒である。この鷹宮市周辺では、一番の学力を誇っており、県内屈指の進学校である。

そこに向かつていた出雲はと云つて、何とかギリギリ間に合ひ自分の席でグツタリしている。

「どうしたあ？ またいつもの『お仕事』って奴か？」

「いつも大変そうだね、一体どんな事をやつてるのかな？」

机に俯せになつている出雲に軽い口調で話し掛けたのは摂津、如何にも軽そうな雰囲気を醸し出している。

心配そうな声色で話し掛けたのは上総、顔や体格のせいでいつも女子扱いされている。

「いや……、今回のはもつと酷いかも」

「？」

出雲の返事に首を傾げる親友二人。

そうこうしている内に、担任の教師が教室に入つてきてホームルームが始まる。

「えー、今日は重大なお知らせがある。このクラスに転校生が来ることになつたー」

その言葉を聞いて、ウオオオオオオ！…と教室中が揺れる。近くの席の摂津が出雲に話し掛けてくる。

「おい転校生だつてよ！ もしかしたら可愛い子かな！？」

「どうしてもお前には振り向かねーよ」

ガハハハ、と馬鹿のように笑いあう一人を尻目に、担任は話を進めしていく。

「じゃあ入つてきてくれー」

「はい」

担任の言葉を受け、扉が少しづつ開いていく。
いやでも美少女だったらしいなー、と思っていた出雲の田に入ってきたのは、

学園の制服を着た、
先程の高飛車な少女だった。

その瞬間、周りの盛り上がり具合に反比例するかのように、出雲の心が冷えていった。

第一章（後書き）

感想など御自由にお書き下さい。
とこづか書いてください、お願いします

「転校生の岩代湊です、よろしくお願ひします」
礼儀正しくお辞儀をしている姿からは、先程の傲慢な態度をまったく感じさせない。

皆が拍手喝采で迎える中、ただ出雲だけが顔に冷や汗を浮かべている。

（あいつ……、よくもまあ、あんな慇懃な挨拶が出来たもんだ……）
などと出雲が思つて居る。

「じゃあだな……、そここの席に座つてくれー」

と言つ担任の声が聞こえた。
ん？と出雲が顔を上げると、出雲の横の空席を指差す担任と、はい、
わかりました、と返事をしてこちらに近づいてくるナナの姿が田に入る。

「……、」

果然としている出雲を尻田、ナナは空席に座り込む。
そして、出雲の方に笑顔で振り向くと平然とこう言つ放つた。

「これからよろしくね、出雲クン」

何故か出雲には、それが悪魔の笑みに見えたそうだ。

「ねえねえ！岩代さんつて何か趣味とかあるの！？」

「岩代さんつて可愛いよね！やっぱナンパとかされるの！？」

時は移つて、休み時間。ミナの席には他のクラスから人が来るほど
の、黒山の人だかりが出来てあり、出雲はいるにいられず廊下に避
難していた。

「凄い人気だね、彼女」

苦笑しながら上総が出雲に近づいていく。

「お前は行かないのか？」

「だつて女の子に興味ないし、男の子といた方が樂しいし」

「お前……、そんなんだから誤解を生みやすいんだぞ……？」

「？」

首を傾げる上総を見て、がぐつたりする出雲。

「やう言えばや、今度この辺りでヒーローがコンサートをするんだよね」

ヒーローとは、この鷹富市出身の女性歌手で、今最も人気の歌姫である。そして、今回の出雲達の護衛対象とは外ならぬヒーローの事である。

「そちらしいな、ファンなのか？」適当に言つた出雲の言葉に、上総が照れて言つ。

「い、いやあ、それ程じゃないよ？CD全部持つてたり部屋中グッズだらけなくらいだよ？」

「ファンと言つかもうオタクじゃねーか」

出雲が呆れながら、上総の頭を軽く叩く。

「もちろんコンサートにも行くよー！」

「だらうな……」

そう他愛ない会話をしていると、授業開始のチャイムが鳴り響く。

「じゃ！今度CD貸してあげるよー！」

そつ言い残して、上総は自分の席に戻つていった。

午前の授業が終わり昼休み、持参した弁当を取り出して食べようとした出雲は、いきなりミナに首根っこを掴まれ連れ去られていった。連れてこられたのは校舎の屋上。いるのは弁当を持って唾然としている出雲と、踏ん反り返っているミナだけである。

「あ、ありのままに起こつたを話すぜーおー「話さなくてよひしこ」出雲の言葉を封じ込めるように、言葉を被せるミナ。

「てか、冗談抜きで何なんだよ一体！？」

「あら、アマイに任務の説明をしようと思つたのだけれども……嫌かしら？」

「是非聞こい！」

ミナの問いに即答する出雲。「素直でよろしく……」

と言つてミナは偉そうに胸を張る。

（お前の方が素直というか、単純なんだけどなー）

と出雲が心の中で思つてゐる事には気付かずに、ミナは話を進める。

「今回の私達の護衛対象よ」

そう言つて、ミナは一枚の写真を出雲に手渡す。

「エニだら、知つてるよ

「あら、流石のアマイでも知つてるのね」

「勝手に俺を流行遅れにするな、ある程度は把握してゐる」

意外そうに声を上げたミナに、出雲が冷静にツツ口む。

「エニつて言つのは芸名ね。本名は能登鈴音、我が軍の参謀総長の親類らしいわね」

「参謀総長ね……、んな会つた事も無い、お偉いさんの親類って言われてもなー」

「ま、一つ言える事は傷でもつけたら首が飛ぶことね」

文句を言つ出雲に向けて、ミナがニヤニヤ笑つている。

「でも、わざわざ護衛まで付ける程じゃないだろ？」

首を傾げながら聞こい掛ける出雲に、ミナがレポートの束を差し出す。

「そこにも書いてあるけど、つい先日『暗黒教会』から暗殺予告が来たのよ」

『暗黒教会』

邪神や悪魔等の、俗に言つ邪悪な存在を崇拜している集団の事である。

その勢力は強大で、出雲達の軍とも幾度となく争いを起している。

だが、何故、所詮一般人でしかない彼等が一つの軍隊と互角に渡り合えるのか。

「『暗黒教会』……、あの『魔術師』達が……」

そう言って出雲が、苦々しい表情を顔に浮かべる。

そう、彼等は邪惡な存在を信仰する事によつて、『魔術』と呼ばれる現代科学では説明できない力を發揮するのだ。

そして、人々は軽蔑と力への妬みとほんの僅かな羨望を持つて、彼等をこう呼ぶ……

『魔術師』、と

(……悪趣味な部屋だ)

あまりこのような事にこだわらない彼女でさえ、そう思わせる部屋だった。

軍の敷地内にある、俗に『参謀機関』と呼ばれているオフィスビルの一室に、彼女はいる。

この部屋の主のセンスなのか、コンクリート剥き出しの壁に掛け軸が掛かっていたり、畳を敷いている上に高そうな革張りのソファーが置いていたりと、ともかく田茶苦茶である。

しかし、この部屋の主である、白々しい笑みを顔に浮かべて、勲章が大量についている軍服を着て、ソファーに座っている参謀総長は、さして氣にもしていないように彼女に話し掛ける。

「最近の調子はどうかね、長門隊長？」

長門隊長、と呼ばれた女性は、対のソファーに座り、その長い黒髪を撫で下ろしている。

「調子は良いんですけどね？ 最近は『暗黒教会』の動きも活発で大変ですよ？」

その甘ったるい声で言われた話の内容に、参謀総長がわざとじりじり顔をしかめる。

「また彼等か……、世界征服が目的だか何だか知らないが、こちらに迷惑をかけないでもらいたいものだ」

「正確には、世界中の人口を生贊にして邪神を降臨させる、とからしいんですけどね？」

「どちらにしろ、我等の敵に変わりはないのだ」

「あ、と参謀総長が溜息をつく素振りを見せる。

「まあ？ その為に我々、特務部隊がいるんですけどね？」

と長門が言うと、参謀総長が目を光らせて長門を見つめる。

「特務部隊と言えば、私の親類の護衛に当たっている筈だがね……」

失敗すればどうなるか、分かるだろ？」

それに対し、長門は全く動じずに見つめ返す。

「別に要人でもない民間人一人が傷つこうが、そんな重罪にはならないと思いますけどね？」

「彼女は我が軍の広告看板の一つなのだ、傷をつけては問題なのだよ」

二人の間の高そうなテーブルに置かれた高級なカップに口をつけ、参謀総長は話を続ける。

「それに彼女の護衛をしている出雲クン……、だつたかな？ 彼は過去に幾つもの問題を起こしていると言つじゃないか……本当に大丈夫なのか？」

「心配には及びませんよ？」

不安げな参謀総長の言葉に、長門が即答する。

「問題と言つても、全て任務遂行の為に単独行動を行つただけですし能力には問題ありませんよ？」

その言葉を聞いて、思い出したように参謀総長が言つ。

「そう言え…… キミ達特務部隊は皆、様々な能力を持つているんだつたな」

特務部隊には、並大抵の人間では所属する事すら不可能と言われている。

状況判断能力や記憶力などの一般的な能力に、武器や軍用車両等の扱いの熟練度といった軍人としての能力が常人より遥かに優れる事。

そして何よりも特徴的なのが、特殊な『能力』の保有者のみが特務部隊に所属されているのだ。

『能力』とは、明らかに常人とは違う特殊な能力の事である。それは様々な場面で活躍しており、特務部隊の尋問は専門の読心能力者が行つてはいたりする。

「キミ達の力は強大だ……、特に出雲クンはね……」

参謀総長は苦々しそうにしながら、言葉を続ける。

「出雲クンの能力を恐れているのは私だけではない、一部とは言え重役達が彼を恐れている程なのだよ……」

その言葉を受け、しかし長門は動じない。

「でも、何も殺す程では無いと思いますがね？」

そう言って、長門はスラリとした細い指に挟まれているレポートを差し出す。

「かつて彼を襲った様々な事故の詳細ですけどね？事故にしては出来過ぎじゃないですかね？」

「私を疑っているのか？私が特務部隊創設の賛同者だったのを忘れたのかね？」

そう言われて、長門は黙つてレポートを仕舞う。

「いくら何でも、味方を殺すほど私は馬鹿ではないさ」

そう言って、参謀総長は葉巻を取り出した。

「さて、彼のお手並みをじっくり拝見していよひじやないか

「と言うわけで！早速、行動するわよ！」

夏の短縮授業と言つ事でいつもより早く授業が終わり、出雲とミナはまだ明るい空の下、鞄を持って通学路を歩いていた。「行動つて……何か当てでもあるのか？」

「当てならあるわよ！」

出雲の問いに、ミナが立ち止まって、防犯カメラから撮つたらしい画質の荒い、一枚の写真を見せる。

「こいつらを見なさい」

ミナが写真に小さく写つている二人組を指差しながら話を続ける。「諜報部が得た情報によると、そいつらが『暗黒教会』からの刺客らしいわ」

その言葉に、出雲がしげしげと写真の二人組を見る。

一人は、顔が随分と人相が悪く、体格がガツチリとしている大男だ。もう一人は、先程の大男と正反対で顔は柔和そうな顔立ちをしており、体はかなり小柄なように見える。

「て一事は、こいつらは『魔術師』って事か……」

「そうなるわね」

出雲の呟きにミナが同意する。

「とりあえずコンサートまでは、暗殺を行えそうな場所の田星でもつけるわよ！」

「……そういうや、コンサートつていつなんだ？」

出雲の問いにミナが呆れたような表情を浮かべる。

「そんな事も把握してないなんて……、馬鹿じやないの？」

「悪かつたな、馬鹿で。で、いつなんだ？」

「今週の日曜よ。県立の自然公園に大掛かりなコンサート会場を造つてるみたいね」

その言葉を聞いて、出雲が考え込む。

「県立自然公園か……、あそこは確か鷹取山の中腹辺りにあつたはずだよな……」

「ええそうね。駅前からバスが出ていて、当田はかなりの混雑が予想されるわね」

「ふむ……、と出雲は考え込みながら、偶然通り掛かつた近くの公園のベンチに座り込む。

「となると、ビルなんかの遮蔽物は無し。絶好の的だな」

ミナは出雲の話を聞きつつ、出雲の隣に座る。

「一応軍の指示で、コンサーク会場を出来るだけ暗殺をしづらい造りにするらしいけど……」

「魔術にそんな小細工が通用するかよ」

ミナの説明を出雲は一蹴する。

「まるで魔術師に会つた事があるみたいな言い方ね」

ミナの言葉に思わず少し黙り込む。

「あるひ……、嫌つて位にな」

「……、そう」

出雲が発した掠れたような声を聞いて、ミナは深く聞き込まない事にした。

「……さて、そろそろ行くわよ……」

ミナが重い空気を吹き飛ばすように明るく言つて放つ。
「行くつてどこに？」

「そうねえ……、じゃあまずは自然公園に行くわよ……」

ガシッ、とミナが出雲の手を強引に引っ張りながら歩いていく。

「お、おー！」

慌てて止めようとするがミナの力がかなり強いらしく、出雲はズルズル引っ張られていった。

「で、ここが自然公園なわけね！」

「今は工事中だけどな」

当然の如く、コンサートの準備中で中には入れないよつだ。

「まあ、三日後だし仕方ないな……」

「何よ歌手の癖して県の所有地を使うなんて！」

「県主催のチャリティーコンサートなんだから仕方ないだろ……」
出雲がぐつたりしながら言つたが、ミナは納得出来ないみたいに頬を膨らませている。

「いっそ護衛と言つて入れないかしら……」

「俺達の存在は極秘なんだよ。参謀総長サマがそれをお望みだそうだ」

キーッーとミナが（男から見たら）可愛らしく怒つて云る。

それを見つつ、出雲は近くの山道へと入つていく。

「とりあえずこの周辺を見ていくだ」

「あつ待ちなさいよ！」

慌ててミナが出雲についていく。

「確かにこの上に見晴らしの良い広い平地があつた筈だ、そこからなら遠距離からの暗殺も……」

「そこを見に行く訳ね」

ああ、と出雲が頷く。

「罠でも仕掛けたければ、連中もあそこを使おうとはしないだろうからな……」

ふーん、とミナが落ちていた木の枝を拾いながら適当に頷く。

「ところで……お前よくそんな格好で山に来れるよな」

？、とミナは首を傾げるが、そう言われても無理はない。

制服が夏用のせいで半袖でスカートに至つては、（制服の制作者の趣味なのか）男子生徒が目のやり場に困るほどの短さなのだ。黒いニーソックスを着用しているものの、その程度で山の虫の脅威には意味が無いに等しい。

しかしミナは笑顔で鞄から何かを取り出す。

「ふつふー、こんな事もあるうかとーちゃんと虫よけスプレーを持参しているのだ！」

ババーン!、と市販の虫よけスプレーを出雲に見せつける。

「山を嘗めてるな、こいつ……」

ミナに聞こえないようにはぐく。

事実、出雲の予測通りでミナは山道を歩いていた間、虫刺されに苦しめられる事となつた。

「……着いたか」

目の前の広い平地を眺めながら出雲が呟く。

「かゆー……、って着いた?」

腕を痒そうに触っているミナが遅れて着く。

全く何してるんだ、と出雲が言おうとした、その時だつた。

「おやおやあ、まつさかこんな所に人が来るなんてねえ」

間延びした声が平地に響き渡る。

「「「？」」

二人が慌てて拳銃を向けたその先には、[写真に写っていた]二人組の姿があつた。

「まさかこうも早く見つかるとはな……」

出雲の拳銃を持つ手に力が入る。

ここに何としてでも抑えつける、何としてでも……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331m/>

任務と日々

2010年10月19日08時35分発行